経済論叢（京都大学）第186巻第3号，2013年4月

〈論　文〉

「哲学」再考からの「経営哲学」の再定義と「看護哲学」の可能性[1)]

桝　井　靖　之

Ⅰ　はじめに　～「経営哲学」再考～

我々は概して「哲学」には興味はなくとも冠「哲学」たとえば「政治哲学」や「教育哲学」には関心がもてる。「政治哲学」や「教育哲学」は，それぞれ政治や教育とは元来何でありどうあるべきかをその根本から学的に追究する学あるいは思想と言えよう。実社会にあっては自他の個人レベルの利益や思惑に翻弄されかねない政治・教育が，公器としての本来の役割を果たしそれを持続させていくためには，まずはそれらの本来あるべき姿を規定してそれを常に心に留め，はずれたとしても再度その原点に立ち返ることこそが重要だからだ。そのために政治にせよ教育にせよ，時に俗世間など他者と対峙することも辞さない緊張関係を覚悟した固い信念や思想としての「哲学」が求められる。つまりそれらは具体的な信念や思想として言い表される。また他方では，カント哲学などと使用する学的な意味での「哲学」とそれとがほとんど同義と主張されるものもある。たとえば「宗教哲学」は，「哲学」という学問を突き詰めれば当然その中心的問題として「宗教」を論じざるを得ず，そこにおいては，「哲学」は「宗教哲学」と内容が一だとする立場もあるからだ。

では「経営哲学」はどうだろうか。まずそれは「宗教哲学」のように「哲学」とは内容が一とはならないであろう。学的「哲学」を突き詰めても「経営」がその中心問題となりそれと一となることはないし，その逆もまた真であるからだ。したがって「経営哲学」は，先の「政治哲学」や「教育哲学」と同様に，「経営」とは本来何であり，それはどうあるべきかということを根本的に追究する学問またそのような姿勢から生まれた信念・思想と捉えられよう。しかし利潤追求を前提とする「経営」という営みが，時にそれにより俗世間など他者と対峙することも辞さない緊張関係も覚悟する固い信念や思想に立ちうるのかという問題がある。「政治・教育」は，元来自己利益を優先的に追求すべきものではないと考えられうる故に，「政治哲学」や「教育哲学」には積極的な意義が見出せよう。それらは，自己利益や有用性を超えた真理探究を目指す「哲学」と組み合わされたとしてもそれほど矛盾や違和感を感じさせることはないわけだ。しかし利潤追求にある「経営」と真理探究にある「哲学」という相反する志向の互いに似つかわしくない組み合わせには違和感があり，消極的な意義しかないのではないか。つまり「経営」が，利潤追求を目的とするならば，当然必要以上に白黒つけず俗世間と対峙したり抗うことなく，穏便にその中で活動することが望ましかろう。「経営哲学」の「哲学」を俗世間など他者と対峙することも辞さない緊張関係を覚悟した固い信念や思想としての「哲学」として重視しては「経営」が利潤を損なう現実離れしたものになってしまうのではないかと考えられるわけだ。したがってそこに「哲学」のようなともすれば俗世間と対峙し自己の不利益につながりかねず自己の営利的営みを危うくするまでの正義や真理への固執はおよそ避けねばなるまい。そのような考えから「政治」や「教育」

と異なり一般には「経営」に「哲学」は積極的には受け入れがたい。受け入れるとしても，通常はそれが明確に経営上の利潤へとつながる限りにおいてであろう。つまり「政治哲学」や「教育哲学」などとは異なり，「経営哲学」にある信念や思想は，一般的には何よりもまず経営上の利益拡大を第一とし，それが労働意欲を促進させまたコンプライアンスを向上させ社会的にも好感度が増すなどといった「経営」をより円滑・発展させるものでなければなるまい。その意味でそれは消極的な意義しかもたぬように見える。そしてそれならば「経営哲学」と言わず「経営理念」，「経営思想」で良いと思われる。しかしその実際は，単に利潤追求だけを目指すことに尽きるわけではない。以下に区分して考察してみたい。

「経営哲学」を論じた書籍は，「経営」を実際に行い熟知した経営者などにより数多く存在している。私はそのような「経営哲学」を「恣意的経営哲学」と名づけたい。さらにそれらを大きく二つに分けることができよう。つまりは，「経営」を営む会社を社会における公器として捉え，利潤追求と共に一見それとは矛盾するかに見える何らかの社会貢献をも「経営」の基本方針にすることを説く「公益追求型」と，単純に利潤追求の営為としての「経営」がどのような考え方ややり方でうまく儲かるかを説く「利潤追求型」との二つである。前者としては，松下幸之助や稲盛和夫の著作にある「経営哲学」がその代表と言える。ここにおいては，「政治哲学」や「教育哲学」にはおよばずともその第一目標を単なる利潤追求と見なさないで公器として自己利益を超えた信念や理想を貫徹しようとする「経営」とは一見矛盾するかのような姿勢が窺える。また後者としては，たとえば磯崎圭二他著『勝ち組に学べ～現代成功社長15人の生き様と経営哲学』（シグマベイスキャピタル，2005年），永井竜造著『野獣派の経営哲学～ビジネス成功の原点』（実業之日本社，1997年）といった書名にも積極的に利潤追求の姿勢が表されている書籍などがあげられる。これらの方が利潤追求を目指す「経営」に見合った信念・思想が説かれているように見える。それに加え，そのどちらかにはっきりとは分類できないものもあるだろう。いずれに属そうとも当然そこには実地の「経営」に基づく優れた考え方が提示されており大変に示唆に富む。両者共に実地の経験から論じられた「経営」についての見解である以上，非常に有益で学ぶべき点が多いことは当然である。がその反面，それらは第三者により客観的に検証されたものではなく，あくまで各々の経営者などが自分なりに思いつくままに自論を展開しているに止まる故に，「恣意的経営哲学」であり，客観性に欠ける可能性も拭えない。

したがって他方，「経営」の中にある「経営哲学」を第三者としての学者が客観的に学的に検討する「学的経営哲学」もまた存在意義があろう。本稿もその「学的経営哲学」のうちに含まれることとなろう。

以上の区分においては，「公益追求型」が「利潤追求型」よりも「教育哲学」や「政治哲学」と同様により利他的であり，有用性を超えた意味合いを持つ「哲学」とより適切な組み合わせであると思える。したがって本稿では「公益追求型」に注目していく。ただしこのような区分においては，「学的経営哲学」の方がより客観的であることが求められるが故に「恣意的経営哲学」よりも優れていると思われるかもしれない。また「利潤追求」より「公益追求」の方がより哲学的で価値が高いと思われるかもしれない。が本来，「公益追求型」であれ「利潤追求型」であれ「恣意的経営哲学」にこそ実地の「経営」で掴み取った経営者の優れた「主体的真理」がある故に「学的経営哲学」よりもその意義ははるかに大きく「恣意的経営哲学」に謙虚に学ぶことこそが，「学的経営哲学」に課せられた使命であることに留意したい。

「経営哲学」
- 「恣意的経営哲学」
  - 「公益追求型」
  - 「利潤追求型」
- 「学的経営哲学」

Ⅱ　「経営哲学」にある「哲学」の二重性の発見

以上のように区分した「経営哲学」は，大なり小なり利他的・利己的傾向といった違いはあるが，いずれもまずは経営上の思想・信念・理念と換言できよう。それは,「経営哲学」にある「哲学」が，一般には，その二つ目の語義，つまりは「俗に，経験などから築き上げた人生観・世界観。また，全体を貫く基本的な考え方・思想」(『広辞苑』)[2] として把捉されているからだ。その点「政治哲学」や「教育哲学」でも同様と言えよう。つまり「経営哲学」とは，一般には，「経営を貫く基本的な考え方・思想」として捉えられ論じられている。前述の通り様々な「経営哲学」に関する書籍が，その意味にあって世にも出ている。我々は，そこから多くを学び教えられる。しかしそれは利潤追求が目的である故に，二つ目の語義を適用しても，前述の通り「政治哲学」や「教育哲学」とは異なり消極的な意義しか持たぬように思われる。したがって,「経営理念」でもなく「経営思想」でもない「経営哲学」としてのその独自性を際立たせようとするならば，当然「経営哲学」の「経営哲学」としか言いようのない由縁を探究する必要があろう。つまりは,「経営哲学」はただ単に「経営思想」,「経営理念」と換言可能なものにとどまるのか，それともそれだけにはとどまらない別の意味をもちうるのか。すなわち「経営哲学」は，そう言わざるを得ない経営上の何某かの一つ目の語義[3] としての学的な「哲学・哲学的なるもの」を含意していると言えるのか。そのような観点から，そこにある「哲学」という言葉に改めて注目しその意味を一つ目の語義として深め再定義し直し，そこから「経営哲学」の意味を独自に定義し，その可能性を明らかにしてみたい。

学的な「経営哲学」研究（たとえば経営哲学学会における「経営哲学」研究）においては，すでにそのような一般的な意味での「経営哲学」に加えて，そこにある「哲学」に俗世間や他者との対峙・緊張関係も辞さない一見経営に直接関係しないかに思われる固い信念や思想の意を含み持たせたところの「経営哲学」研究も模索されてきた。それは，概してその研究対象としての経営・経営者に成立している哲学的要素つまりは哲学的思想を見出すものであり，私の区分では「公益追求型」の「恣意的経営哲学」の中に含まれるものであり，優れた論文が多数ある。しかし私は，そのような個々の実地の経営・経営者の中にある哲学的思想としての「経営哲学」を探し求め明らかにする先行研究とは異なり，前述の通りまず最初に「経営哲学」つまりは経営者がそれに基づいて経営する「経営の要」としての「哲学」を一つ目の語義，プラトンやカントにある学的意味での「哲学」として積極的に措定し自明に見えるその意味を再度独自に学的に定義し直したい。そして「経営哲学」を独自に定義づけたい。また次にその意味での素朴ではあるが「哲学」的要素が経営の要として成立しうることを明らかにし，それを経営上の哲学的思想とは異なる新たな学としての「経営哲学」として提唱してみたい。

そのためには，独自にそのように定義づけた「経営哲学」が，実際に経営者の「経営」の中心に据えられ「経営」の重要な要になっていることを検証し明らかにしなければなるまい。私は，この点に関して，利潤追求を第一とはしないと断言する京セラ株式会社稲盛和夫名誉会長の経営姿勢の内に，そのような「哲学」的なるものの可能性を探ってみたい。それへと気づかせたのは，私が研究会発表中に「経営は利潤を追求する営みである」と言及した際に京セラ経

営研究所の研究者から受けた「経営は利潤追求ではない」という強い信念に基づく反論だった。それは，私に「経営」という戦場に建前ではなく金勘定でもない，「哲学」的要素が入り込む余地を予感させた瞬間であった。また他方「哲学」がともすれば難解な哲学用語の羅列で満足され，一面的で硬直した哲学観に止まってしまうのではないかと危惧する私には，そのような真摯な経営姿勢は新鮮な驚きであった。それと共にそれは，単なる知識に堕ちた「哲学」と利益拡大にのみ目が向きがちな経営現場とに何らかの新風を吹き込む可能性を感じさせた。そこで，この考察においては前述の通り自明と思われていた「経営」と「哲学」へのイメージを一度白紙に戻し「哲学」を再考・再定義し，そこから一経営者稲盛和夫の「経営」にあるその一つ目の語義としての「哲学」的要素を見出す中で，新たな「経営哲学」の可能性とその意義とを明らかにしてみたい。この考察においてこそ，「恣意的経営哲学」の「公益追求型」の中に「経営理念」や「経営思想」とも異なりまたさらに「哲学的思想」とも異なる私がまず定義づけたところの一つ目の語義としての「哲学」を見出すことができるだろう。しかも私の論じるところの「経営哲学」が，単なる論に終わることなく，「経営の要」として経営者により積極的に用いられうることを学的に明らかにすることにより，さらにそれは，利潤追求に走るあまり不正へと舵を切りかねない「経営」という営為を求められる公器へとも目を開かせて導く，一つの「学的経営哲学」となろう。

Ⅲ　「哲学」再考

「哲学」とは何か。「哲学」とは，まずは具体的にはこれまでの哲学史上に構築された多種多様な「哲学」を指すだろう。したがって我々が「哲学」に取り組む場合，差し当たっては，それらを学び理解すること，さらに可能ならばそこから自分の哲学的見解を構築することが求められよう。しかしそのような哲学観や「哲学」への取り組みだけでは，「哲学」が本来もつ豊かな学的営みの真髄が見失われてしまう。したがって私は，「哲学」を単に既成の構築物として捉えるだけではなく，さらに「哲学」を原意に基づき我々が行う構築途上にある思索的営みとしても捉えるべきだと考える。そのために以下にその原意から読み解いてみたい。

「哲学」の原意について考察する場合，西周による訳語がその障害となる。つまり古代ギリシアに始まる「哲学」（Philosophia）とは，Philo（愛）とSophia（知）とからなる言葉であり，原意は「知ることへの愛」，「知を愛すること」である。この原意を尊重して，英語ではPhilosophy，ドイツ語，フランス語ではPhilosophieとほぼそのままの言葉で表現されている。

またヴァイツゼッカー（Carl F. von Weizsäcker, 1912～2007）は「哲学」をこの原意に基づき「知ることへの愛」，「知識への愛好（Liebe）」であるとし，この愛好にドイツ語では伝統的にリーベ（Liebe）という語を用いてきたと指摘，そこからさらに「哲学」の原意について考察している。すなわちこのリーベ（Liebe）という言葉は，「愛好する対象の所有・独占を意味してはいません。むしろ，対象への限りない愛着，あるいは対象を強く求める，という意味合いがそこにはあります。従って，ここでいわれる知ること，あるいは知識は，単に技術的な可能性を意味しないのです。可能か，不可能かを単純に指す言葉ではないということです。あるいは，それはまた単なる実用が可能か否かを判断することを意味する言葉ではありません。そうではなく，ここで語られる知識とは，問いをくり返す力，再度問い返す能力の有無を指し，同時に応答がつねに豊かな思想の地平を内に秘めたその内実を意味しているのです」[4]と言う。

他方ヤスパース（Karl Jaspers, 1883～1969）

は,「哲学」を問う際にまず「哲学者」の原意から論を展開する。その着眼点もまた，彼独特の原意に忠実な哲学理解に根ざす。つまり彼は，「哲学者（philosophos）というギリシア語は，学者（sophos）と対立する言葉であって，知識をもつことによって知者と呼ばれる人と異なり，知識（知）を愛する人を意味する言葉」[5] であると言うわけだ。ここにおいて彼は，一般にある難解な専門知識を所有する学者そのものといった哲学者のイメージを瓦解させる。哲学者と学者とを全く相対立するものとして再確認させるわけである。そして我々自身の知識人・学者の側に安住し，知識・教養を増し加える体で「哲学」を学び知ろうとする態度が問われ疑問に付されることとなる。哲学者とは，元来，学者とは全く相容れない人たち，知識に関わりつつも，それを自分のものとして覚え応用し利用する学者とは異なる学的態度に立つ人々だと言うのだ。古代ギリシアにおいてはこの学者とは，具体的には詭弁家（ソフィスト）を意味し，我々は哲学者と詭弁家を対立させることで満足してきたが，彼にあっては哲学者を学者と対立させ我々自身の知のあり方をも再検討しなければならない契機へと誘われることとなる。

さらにヤスパースは,「哲学」を「哲学すること」と同義として捉えている印象をその文脈から受ける。つまり「哲学の根源」についての考察において，彼は,「哲学」の「根源というのはいかなる時を問わず,『哲学すること』への衝動が生まれる源泉をいう」[6] と言い，また「総括して申しますと,『哲学すること』の根源は驚異・懐疑・喪失の意識に存している」[7] と言う。ここにおいて彼は,「哲学」の根源を論じるところで，何度も「哲学すること」の根源と言い換えて論じている。つまり彼は，文中で「哲学すること」を「哲学」と同義として使用しているのだ。では彼にとって「哲学すること」とは何か。彼は,「哲学の本質は真理を所有することではなくて，真理を探究することなのであります。哲学とは途上にあることを意味します。哲学の問いはその答えよりもいっそう重要であり，またあらゆる答えは新しい問いとなるのであります」[8] と言う。そして「この途上にあること（auf dem Wege sein）――時間のうちに存する人間の運命――はそれ自身のうちに深い満足の可能性を隠しているのであります。……このような可能性はけっして言葉で表わすことのできる知識や命題や認識のうちに存するのではなく，人間存在の歴史的な実現過程のうちに存するのであって，存在そのものはこの人間存在にとって現われ出るのであります。人間がそのつどおかれている状況のうちにこの現実をとらえることが『哲学すること』の意味なのであります」[9] と言う。さらに彼は,「哲学とは何であるかということは，私たちによって実験されなければならないことなのです。かくて哲学は生きた思想の実現であり，またこの思想への反省であります。あるいは哲学は，行為であり，この行為について語ることであります」[10] と言う。したがってここにおいて哲学,「哲学すること」とは，自らが置かれているその現実を捉えるために，立ち止まらずに問いを深めていくこと，知を愛する内的行為だと言えよう。

またオーストリアの「哲学」の教科書『哲学すること』（Think Philosophieren Ein Lehrbuch）の「序論」において，マッショ（Thomas H. Macho）とピッケル（Dietmar Pickl）は,「哲学は，企てられた好奇心であり，この好奇心は，一定の対象に縛られることもなく，また一定の方法，カリキュラム，また特別な領域においても持続的に縛られることがない」[12] と言う。ここにおいて「哲学」は，この「知ることへの愛」の意を汲み「好奇心」としてうまく表現されている。そして好奇心故にそれは，形而上学や認識論といった枠を縦横無尽に超えていく。また個人の自発性に委ねられるべきものである故に，好奇心は「哲学」は他から教えられることができるかという疑問が生じると言う。した

がって「哲学」を学ぶことは，外から教える・教えられるの次元ではなく，その人自身の内からの好奇心にあって何よりもまず自ら「哲学すること」に発する。つまり彼らは，続けて「インマヌエル・カントは哲学講義に自分で考えるという原則に基づくことを断固として要求した。哲学とは，〜 彼の命題が言うように〜 ただ 哲学すること においてのみ，哲学的な熟慮による実際的で行動を伴う実行においてのみ獲得される。哲学は，うまくいった試験の後ですぐにまた忘れてしまう『テスト用の教材（Prüfungsstoff）』で『外から』習得することはできないのだ」[13] と言うのだ。「哲学」という「知ることへの愛」においては，何をどこまで学び深めていくかは用意されたテキストにではなく，自らの「哲学すること」にかかってくる。

その点カント（Immanuel Kant, 1724–1804）には，前述した通り原意に沿った「知を愛すること」の重要性をしっかりと見据えた哲学理解が窺える。次にカント自身の言葉から引用してみよう。カントは，「哲学すること」を強調し，「哲学すること philosophieren ができなくても，哲学 philosophie を学ぶことができる。だからおよそ哲学者となろうと欲する者は，自己の理性を自由に使用して，たんに模倣的な仕方で，いわば機械的に使用することがないよう訓練しなければならない」[14] と言う。さらに彼は，「哲学することは，理性を訓練して自己自身で使用することによってしか学ばれることができない」[15] とも言う。そして彼は，「真の哲学者は，自ら思考する者 Selbstdenker として自己の理性を自由に自己自身で使用しなければならず，奴隷的に模倣するような仕方で使用してはならない」[16] と言う。

ここで難解な哲学を構築したカント自身もまた，「哲学」を学ぶことにおいては，出来上がった諸哲学を単に知識として学ぶのではなく，まず我々自らが「哲学すること」にあって様々な「哲学」と格闘することこそが重要だと言うのだ。カントは，まずは哲学的構築物としての「哲学」と，原意「知ることへの愛」，「知を愛すること」に沿った内的行為としての「哲学すること」とを明確に峻別し，後者の重要性を強く主張するのである。西洋哲学史上に輝くカント哲学を構築したその本人が，「哲学すること」の重要性を主張するのであるから，我々はそれを軽視するわけにはいくまい。そのような姿勢こそがカント哲学を生んだからである。

以上のように，ヤスパースは，「哲学すること」を重視し，それを「哲学」と同義として文中で使用している。またカントも，構築物としての「哲学」と「哲学すること」とを分け，ともすればないがしろにされがちな後者の重要性を説く。そしてそのような独特の知的姿勢こそが，これまでの哲学史上における様々な偉大な「哲学」を構築してきた。しかしそのことが逆に哲学的構築物，諸哲学にばかり心が奪われる結果を生じさせ，この原意を軽視させ，「哲学」の意味を単に諸哲学だけに解するにいたらしめているようにも思われる。つまり我々は，その原意に心を留めることなく無視するか，さもなくばそれを押さえたところでそれは素朴な初期の哲学的姿勢・源泉にすぎないと考えて軽視するかであり，むしろその姿勢から構築された諸哲学にこそ重要性を見出し，それらをひたすら学ぶことこそが「哲学」の唯一の本筋であると考えてしまう傾向にあるわけだ。確かに諸哲学は「哲学」に違いない。しかしそれは，「知を愛すること」から生まれた結果であることを忘れてならない。この点，ハイデガーも，「哲学教授の普通の，当然の，そして有用でさえある仕事と言えば，いままであった哲学について一般的教養に必要な程度の一定の知識を授けることである。そしてこのことが既に哲学であるかのように見えるけれど，これはたかだか哲学学にすぎない」[11] と言っている。したがって「知を愛すること」において構築された「哲学」を理解するには，それが生まれる過程にあった「知を愛

すること」を軽視せずにそれをも視野に入れ，また自らもそれを実行・追体験しつつ哲学書に当たらなければなるまい。つまりそこから我々は，「諸哲学は，我々自身が『哲学すること』において読み解いてこそ，初めてその真の内実を我々に与えるのだ」と教えられる。我々は，自ら「哲学すること」の中で諸哲学・諸現実を問いそして格闘してこそ，それらへの理解を深めることができるのである。

以上の考察から私は，「哲学」の本質を明らかにするために，「哲学とは哲学することである」と定義づけたい。この定義は，名詞を動詞にしただけであり，同語反復のようではあるが「哲学」と一体である重要な行為「哲学すること」を強調するに有益であろう。当然辞書や解説書にある一般的な定義とは異なり，それだけで満足されるべき解釈・定義ではない。また確かに「哲学」を一つの哲学観に固定化してしまうと「哲学」の豊かさが見失われてしまう危険性があることに留意する必要もあろう。しかしその一方で，「哲学すること」を強調するこの定義は，以上の考察から分かるように，「哲学」の原意からもまた哲学者カントやヤスパースらの哲学観からも全く逸脱するものではない。またそれは，「哲学すること」という分かっていても諸哲学を学ぶ中で次第にそこから逸脱してしまったり，始めからそんなことには目を向けずに難解な用語の暗記に満足してしまう中で，軽視され看過されてしまう「哲学」の真髄へと立ち帰らせる契機を与えることにおいて有益である。特に情報過多で多種多様の哲学が混在し哲学の本質がともすれば見失われかねない今日において，この定義は意義があろう。つまりそれは，今や単なる知識に落ちつつある「哲学」に対して，「哲学すること」を強調してそこに再び命を吹き込む契機を与える一つの定義づけなのである。その意味で有益なのであり，それ以上でも以下でもない。

Ⅳ　「哲学すること」として「異常なことを問うこと」

では「哲学すること」とは何であろうか。「哲学すること」とは，具体的には哲学者の原書に学ぶ中で遂行され，また哲学的な問いを自ら立てる内に遂行される様々な哲学的思索であると言える。また前述の通りヤスパースに従えば，それは，自らが置かれている状況下にあってその現実を捉えるために，立ち止まらずそれへの問いと理解を深めていくことである。まずは哲学者らは「哲学」，「哲学すること」をどのように具体的に捉えたのかを考察し，それへの理解を深めたい。そこから「哲学」の「経営」における可能性が見えてくるとも考えられるからである。

カントは「哲学」の領域は，「(1)私はなにを知りうるか。(2)私はなにをなすべきか。(3)わたしはなにを望むことが許されるか。(4)人間とはなにか。」[17] という問いに帰することができると言う。この有名なカントの問いから我々は，「哲学」が科学とは異なり単なる対象にとどまらない，ここに人生行路を生きていく人間として自分自身への問いかけであることが理解できる。

またハイデガーは，明確に「哲学すること」は問いという形で表されると言う。すなわち彼は，「哲学するとは『なぜ一体，存在者があるのか，そして，むしろ無があるのでないのか？』と問うことである」[18] と言う。ここにおいては世界が問われている。そして「ほんとうにこのように問うということは，この問いが問うことをわれわれに要求しているそのものをあらわにすることによって，この問いの汲み尽くしえないものを汲み尽くし，余すところなく問い尽くそうと，あえてすることである。このようなことが生起する所，そこに哲学がある」[19] と彼は言う。またさらには，「われわれが思惟しつつ周囲を見渡して，この問いの方向に向かって行こうと心を開くならば，まず存在者の普通の領

域のどこかに立ちどまることをすべて断念したことになる。われわれは平常どおりのことを超え出る。……哲学するとは異常なことを問うことである。けれども初めに示唆だけしておいたように，これを問うことは結局，自己自身へと跳ね返ってくることになるのだから，問われているものが異―常であるだけでなく，問うことそのことが異―常なのである。……この問うことは一般的な要求に急いで応じたり，それを満たしたりすることの範囲内にあるのでもない。この問うことそのことが尋常平凡事の外にあるのである。それは全く自発的であり，すっかり，そしてもっぱら自由という深遠な根拠，さきに飛躍と呼んだあのことへと基づけられている」[20] と彼は言う。ここにおける「哲学すること」に対する彼独特の言い回しが興味深い。彼にあって「哲学すること」とは，「なぜ一体，存在者があるのか，そして，むしろ無があるのでないのか？」と「異―常なことを異―常に問うこと」[21] なのである。

以上の考察から，その「哲学すること」とは，何か直接は日常生活に不必要な問いではあるが，人間としての自己とそれを取り巻く世界，さらにそれらが織りなす現実を知ることを愛し求める故にあえて「異常なことを問うこと」だと言えよう。この異常な問いという過程をへてこそ，答えとしての諸「哲学」が構築されてきたのである。我々は，このような異常な問いを発し，「哲学すること」を自ら遂行しつつ，哲学者らの哲学的足跡を追随してたどる中でこそ，様々な「哲学」の内実に真に触れ，そこから現実をより深く理解する可能性を開くことができるのだ。ここに問いとしての「哲学すること」の無視できない重要性が見て取れよう。

Ⅴ　ポジティブ・セーフティとしての「哲学」の今日的意義

難解な用語が並ぶ諸哲学は一般には敬遠される。またこれまで考察したところから「哲学とは哲学することである」と言ってもその魅力は増すことがないかに見える。つまりは異常な問いを自問自答することとしての「哲学すること」は，前述の通り諸「哲学」を理解する上では重要であっても，日常生活に役立つとは思われず受け入れがたいからだ。しかし一般にも「哲学」は看過されるべきではないと私は考える。そのことを車の専門用語である「パッシブ・セーフティ」と「ポジティブ・セーフティ」を使用して自論「哲学・ポジティブセーフティ論」から簡単に説明してみたい。そこから「経営」における「哲学」の必要性も浮かび上がってこよう。

「パッシブ・セーフティ（passive safety）」とは，車の事故直後に受け身とならざるをえないドライバーと同乗者の安全を守る安全策のことである。たとえば，ドライバーと同乗者が衝突の衝撃でハンドルなど前方の物にぶつかる衝撃を和らげるクラッシャブルボディやエアバッグなどがあげられよう。それは，事故直後のドライバー・同乗者が，もはや自分たちではどうしようもない危機的状況をできるだけ回避しサポートしてくれる装置なのである。それに対し「ポジティブ・セーフティ（positive safety）」とは，ドライバーが衝突など走行上の異常事態を未然に防ぐために，車の各パーツに工夫をし，ドライバーと同乗者の安全を守る安全対策のことである。それは，ドライブをサポートし，そのドライブテクニックの内に主体的に生かされ，より快適なドライブを可能にするのみならず，事故を可能な限り未然に回避するための装置である。たとえば，ドライバーの急ブレーキによる車輪ロックを防ぐ ABS といったブレーキシステム，ドライバーによるハンドル操作をより容易にしたパワーステアリング，さらにはドライバーの視覚を向上させるドアミラーやワイパーなどがそれである。私は，我々の日々の生活をここでドライブに譬え，「心理学」を前者「パッシブ・セーフティ」，「哲学」を後者「ポ

ジティブ・セーフティ」として以下に考察してみたい。

「心理学」とは，主に心理学者が心の病にあるクライアントに治療を積み重ね，その中から掴み取った人間心理の学的解明と言えよう。我々は,「心理学」から心のあり方について教えられること大である。そして言うまでもなく前節で見たように人間理解にそれは大いに役立つ。ただ本来「心理学」は，心の状態が比較的安定し，また心の不安定さを自分である程度制御し克服できる状況にある際にはそれほど差し迫った希求の学問ではない。むしろ「心理学」は，落ち込んだり心の状態が不安定となり，自分であるはずの心が自分でもどうしようもなくなった時にこそ,「心理学」は我々にとり自らの不安定な心の舵取りを教えてくれ真摯に聞き従うべき希求の人間学「こころの処方箋」となるのである。つまり「心理学」とは，一般人の我々からすれば，日々の生活上での些細な人間同士のトラブルなどによる落ち込みや働く現場での大きなストレスなどの中で車がクラッシュするかの如くに何か心の病に見舞われ日々の生活にさえ支障をきたす事態に陥った際にこそその助けとして重要となる。つまりその際には，自己の心の状況を心理学上の諸学説やカウンセラーの助言に耳を傾け，さらに深刻な場合にはできるだけダメージ少なく立ち直れるよう心を委ね治療を受ける。したがってそれは，他力的な「対処療法」の性格が強い。それ故に私は心理学をパッシブ・セーフティと譬えたい。

一方で「哲学」は，自他であるところの「ここに生きている人間」とそれを取り巻く世界についての学である。普段見慣れた道も，サイドミラーから見れば今まで看過しまた見えなかった現実が見えてこよう。見通しの悪い豪雨の中でも，ワイパーやヘッドライトによりこれまで見えてこなかった現実が目に飛び込んでくる。「哲学」には，そういったポジティブ・セーフティの如くに，人生の道程を歩む上での周囲の状況把握や走行の安定性の向上，さらには目的地やそのルートに対する幅広い視野の獲得といった長所がある。したがって我々は，その学びにあって自己と世界に関して科学とはまた異なる仕方で論理的に理解し見据えることが可能となる。

しかしただ見通しがきくようになるだけではない。車にあるそれらの安全装置は，ドライバーが千差万別の様々な状況下でどこかへ向かって走らせてこそ生かされうる。その際ドライバーは,ただ単に安全装置に頼るのではなく，様々な状況の中で，それらの情報や経験を積み重さねて生かしつつ常に注意深く現実を捉えまたどこへ向かうか考え，理解力と判断力を養っていくことが重要であろう。それと同様に，我々が主体的に問い判断し決断し生きていく内でこそ「哲学」は生かされうる。それは，その現状を見極める助けとなりそこからの次なる行動をより確かなものとなしうる。つまりは，前節までで考察した自ら「哲学すること」という現実理解への飽くなき追求こそが，人間としての自己について，またその置かれている現実について理解を深めさせ，働く現場を含めた日々の生活の歩みをより主体的に確かなものとし，生をサポートし充実させてくれるのだ。またそれは，我々にある人間や世界に対する先入観を排除し，さらにはより良き生き方を自分自身でひねり出す契機を与えてくれる。実際に生きる歩みの中で,「哲学すること」を遂行してこそ，自分自身の状況を時代に左右されることなくまた偏りなく考え理解し，これまで気づかなかった広い視野からの現実が見えてくるのだ。そこからさらに，その都度置かれた状況の中で自らの無知を知り，真の謙虚な姿勢を体得し，さらなる鋭い知的眼光や審美眼体得の可能性が開かれる。自らの理性を「哲学すること」において鍛え，自らの状況とそこにある様々な真実を知り深める中で思考力を養うことにおいて，より良き人生へと積極的に歩むことができる。そう

いった意味で「哲学」は，日々の生活の具体的支障の有無にかかわらず，我々にとり積極的により主体的によく生きていくために重要である。「哲学」は，言わば自衛的な「状況分析対応能力」，ポジティブ・セーフティなのである。

「心理学」は，理屈では片づかない我々人間の心の存在とその不思議さについて理解を深めさせてくれる。さらにまた人生の道程で立ち止まりふと自ら心について考える時や心が病んだ場合，我々は「心理学」に「対処療法」としてお世話になることは必要不可欠だ。しかしその「心理学」と共に，以上のような我々の日々の歩みをより視界良好で確かなものとし主体的な「状況分析対応能力」を養う「哲学すること」としての「哲学」もまた必要不可欠だ。またさらにこの「哲学」は，自他であるところの「ここに生きている人間」に対する理解を自ら深める中で，経営者の立ち位置のみからは見えてこなかった新たな視野を獲得する契機を与えるであろう。その意味で先行き不透明な今日において「哲学」の意義は大きい。一見難解に見えても一般にも看過されるべきではないのだ。

Ⅵ　新たなる「経営哲学」の可能性 ～稲盛和夫にみる「経営」と「哲学」の接点～

以上のように私は，「哲学」を「哲学すること」と定義づけたのであるが，そこから独自に「経営哲学」を確立するには，実際の「経営」におけるそのような「哲学」の意義と可能性を証明しなければなるまい。特にここで論点となることは，利潤追求を目指す「経営」を先頭に立って担う経営者自身が，そのような意味での「哲学」と何らかの関係をもちさらにそれを自らの経営に実際に生かすことがありえるのかということである。一般にはそのことが，経営上も有益であることなど夢物語だと思われよう。確かに先にあげた二つ目の語義としての「哲学」ならば経営者にとり経営上有益となりうることは想像できる。また先行研究にあるように，哲学的な視点から経営を客観的に分析することや経営学者にある哲学的思想を探るといった研究の意義は容易に理解できる。が「哲学すること」つまりは「哲学的思索」は，漠然と考えるならば利潤追求を目指す経営者にとっては何の益にもならない邪魔もの以外の何物でもないかに見える。しかしその一方で前節で考察した「ポジティブ・セーフティ」としての「哲学すること」は夢想のように思われたそのイメージを一新してくれた。したがって私は，独自に「経営哲学」を単に定義するのみならず，その「経営哲学」に基づき経営を行う経営者の実例を探し出すという難問を突破せねばなるまい。

ここで注目したいのは，先にあげたように京セラ株式会社名誉会長稲盛和夫である。稲盛は，何よりも経営において「『儲かるか，儲からないか』というような私利私欲にもとづいた判断基準ではなく，『人間として正しいことを貫く』といった普遍的な判断基準を持ったことで，会社がうまくいったように思います」[22] と言う。また彼は，2001年に「京セラとKDDIをあわせた売上は，４兆円を超えるまでになっています。これが，27歳で会社をはじめて42年間『人間として何が正しいのか』ということだけを座標軸にして人生を歩んできた結果です」[23] とも言う。しかも驚くべきことは，彼がたとえ会社を潰すことになっても，「人間として正しいこと」を守るべきであると言い切る点である[24]。ここにおいて彼は，「経営は利潤追求を第一とする営みだ」という一般的な意見を完全に否定する。彼は，経営上役立つ道徳として単に「人間としての正しさ」を持ち込むのではなく，利潤追求や経営よりもその問いを何よりもまず優先するのだ。彼は，利潤追求どころか会社の存続さえも，「人間として何が正しいか」の前に執着しない。そのような人間を問い，人間としての正しさを守るためになら会社を潰してもい

いという経営者にある徹底ぶりは注目に値しよう。まさに以上の拙論を参考・引用し，京セラ株式会社秘書室経営研究部副責任者木谷重幸は「稲盛和夫の経営哲学」[25] を論じている。つまりは，私が注目した稲盛が「人間として何が正しいか」を判断基準とした経営を行うという論点，さらに会社の存続よりもその正しさを選ぶという稲盛の発言とヤスパースが哲学を内的行為として捉えるという私の引用箇所を彼もまたそこで同様に使用し論じているのである。その論点や引用箇所は，私が 2008 年 3 月 28 日に経営哲学学会関西支部，PHP 研究所特別研究座会「経営哲学形成の源流を辿る～松下幸之助と稲盛和夫～」(於　PHP 総合研究所 7 階ホール) において行った発表「哲学的経営者稲盛和夫における経営と哲学の接点」の中でも発表した内容であり，その出席者であった彼はそれ以来拙論を肯定的に受け止め，ここで引用するにいたったと考えられる。したがって木谷の主要参考文献には，本稿の元となった拙論が収められている『経営哲学を展開する』があがっている[26]。拙論への肯定的姿勢に対する感謝と共に，ここで重要なことは，稲盛和夫と苦楽を共にしてきた優秀な部下である彼が，以上の拙論を支持し自らの論に引用しているということである。それにより拙論に基づく本稿は，非常に心強い支持者を得たと言えよう。

そしてさらに指摘するならば，稲盛が重んじた「人間として何が正しいか」というその問いは，前述したハイデガーの論によるならば，「異常な問い」であると言えよう。つまりそこには，経営という生き残れるか否かの言わば戦場にあって，素朴ではあるがその営みにふさわしくない利益にも直接関係しない「異常なことを問うこと」が読み取れるわけだ。

ここに，我々は経営者の中に哲学的要素を見出し，「経営」と素朴ではあるが「哲学すること」との接点を発見することができる。そのような「哲学」的要素，つまりは素朴な哲学的問いそのものを「経営の要」とし，優れた経営手腕を発揮した彼の「経営」の内に，我々は「哲学」を一つ目の語義で解した「経営哲学」の可能性を見ることができよう。彼の「経営」においては，利潤よりもまず「人間として何が正しいか」を問い追求するという素朴に「哲学すること」がより大切であり，その「経営哲学」が意図せずとも結果的には大きな利潤をもたらし究極の経営術になりえた。その一因は，「経営」においても実は人間として普遍的な規範を探る日常と実利を超えた「異常なことを問うこと」で，現実を深く見つめ理解し的確な経営判断が下しえるからではないだろうか。それは前節で考察したように，「哲学」が「状況分析対応能力」，ポジティブ・セーフティとして一つの視点に偏った偏見を揺さぶりそこから自由にしてくれるからだ。また二つ目には，その哲学的な問いを共有し共に考えることを通して，経営者と社員が共に同じ人間として共感し合い，その中で人間諸個人の生は充実し経営上のチームワークが強化されるからだと考えられる。

このように，「哲学とは哲学することだ」と捉え，またその「哲学」的視点から素朴に「哲学すること」を経営の中に探ることで，「哲学」とは無縁に見えた経営者へのアプローチも可能となり，「哲学すること」が経営においても素朴な形で意味をもち良き効果をもたらしていることが実地に理解できる。また成功した経営者というものは，彼のように問いという形で明確に提出しないまでも，人間・世界といったものに深い思索の目を向け問う「哲学すること」という姿勢を大なり小なり体得しており，私利私欲から自由な広い視野と深い現実理解から様々な経営判断を独自に下していると考えられる。

たとえば松下幸之助は，「かえりみますと，私は満九歳の時からいわば実業一筋の歩みを続けてまいりました。その歩みのなかで，私は私なりにこれまでの人生を通じて，折にふれ事にあたって，人間というものについて，また社会と

いうものについて考えてまいりました。とくに終戦直後の，あの混乱した悲惨な世の姿をまのあたりにみて，やむにやまれぬ思いから，昭和二十一年十一月三日にPHP研究所を創設，……そうしたなかから，知らず識らずのうちに一つのまとまったかたちになったものがこの『人間を考える――新しい人間観の提唱――』です」[27] と言っている。したがって彼もまた人間についてまた社会について真摯に考え続けていたことがここから読み取れよう。

また松下にとって経営とは，「総合芸術」であると言う。つまり彼は，経営においては，その基本方針，人材の確保，工場の設計などあらゆる面で，「白紙の状態からひとつひとつ定め，各方面にわたるバランスをはかって，細かい心くばりをしながら経営を進めてゆく必要があるわけです。言うなれば，無から有を生み出してゆくというか，絶えざる創造工夫を通じて，あらゆる面でよりよき創造を行っていくのが経営だ」[28] と彼は言うのだ。「その経営活動が，非常に適切にバランスよく行われるならば，各方面の経営活動というものに，経営者の生命が生き生きと躍動した姿であらわれてくる。そしてそれを見る人に大きな感動を与え，すばらしい経営だな，と嘆賞させるようなものが，創造されてくると思うのです」[29] と言う。また彼は，「経営の中に社会の真の繁栄，人びとの福祉の向上にも資するというような，いわゆる善の精神が行きわたっていなかったならば，その経営は，社会に益を生むどころか，かえって害を及ぼすものにもなりかねません。言いかえれば，ほんとうの芸術的経営であるためには，その中に，真・善・美の三つがともに生かされていなければならないのではないかと思うのです」[30] と言う。彼にあって経営とは，単に私的でそれに関わる者だけで完結するものではなく，社会に広く益を生み認められてこそ価値のある「総合芸術」なのである。

また松下は，「徳川時代の『士農工商』といった階級的な考え方，つまり，『商』というものはいちばん身分の低いものである，商人は利益ばかり追求する，利益を追求するのは俗事に属する，軽蔑に値する，というような風潮が，今日も残っているのではないかという感じがするのです。私は，このような考え方は，全く的はずれなものであるといわねばならないと思うのです。なぜなら，今日，各企業は，社会的にいろいろ大切な使命，役割りを担っています。そして，こうした企業の社会的な使命，役割りというものは，企業が適正な利潤を得てはじめて果たせるものです。もし，各企業が利潤を得ないということになりますと，税金も納められない，従業員の給料も払えない，したがって企業の社会的使命の達成などということはとうてい実現もできません。また，そのように税金が集まらないということでは，どうやって国家経営を営むかということにもなってくると思うのです」[31] と言う。そして彼は，そう考えると「企業が利益を得るということは，恥ずべきことというよりも，むしろ誇るべきことだといってもよいと思うのです。もちろん，道にはずれた暴利をむさぼってはならないことはいうまでもありません。それは経営道に反します。ですから，あくまでも道にかなった適正な範囲のものでなければならないわけですが，適正利潤であるかぎり，利潤を確保していくということは，企業なり経営者の当然の社会的義務だと思うのです」[32] と言う。以上から彼は，経営を広く社会・国家をも視野に入れた公益・国益に通ずる社会的使命と考えていたと言えよう。彼は，芸術作品がそうであるように，自らの企業が自らの作品であると同時に公共のもの「公器」であることを強く自覚していた。だからこそ経営は，単なる利潤追求を超えた公益を目指す営みだという強い信念が彼にはあった。その信念は，社外の他の人々も含めた人間と社会への深い愛と理解に裏打ちされておればこそ堅持されたのではないだろうか。また彼は，「企業経営

というものは，時々刻々に変化し，発展する社会の情勢に応じて，常に生成発展するものでなければならない。そうでないと，その経営は時代遅れになってしまって，常に生き生きと躍動し，その芸術性を保つことができません。それでは駄作になってしまいます」[33] と言う。そのように先陣を切ってすべてをゼロから作り上げ，一企業を築き上げそれを軌道に乗せるには，芸術作品のようにそこに多くの人々の賛同が得られる的確な世界観・人間観，さらには人生観，・仕事観といったものに立たなければならないだろう。したがって，彼が言うところの無から有を生み出してゆく人々に感動を与える「総合芸術」としての経営においては，人間・世界そしてそれらが織りなす現実を根本から理解することが求められる。つまりその抽象的な存在に尽きることのない「ここに生きている人間」を常に問い愛し理解し続ける「哲学すること」によればこそ，人々が信頼を寄せ共感することができる経営が可能となったと考えられる。彼においても，「状況分析対応能力」，ポジティブ・セーフティとしての「哲学すること」がここに読み取れるのである。多くの人々を魅了する松下にある芸術的な創造発展は，ソロバン勘定だけでは不可能な時代・社会・人間への深い理解を愛し求め続ける素朴な「哲学すること」による作品だ。経営の神様は，真の PHP（Peace and Happiness through Prosperity）の探究に向けた研究の拠点，PHP 総合研究所を設立したが，それは経営の現場での「哲学すること」が積極的に具現化されたものとも言えよう。今日のパナソニックは，今こそそのような原点に立ち戻らねばなるまい。

以上の考察から，経営者，特に稲盛にある「経営哲学」，つまりは経営においてその要となる素朴な「哲学すること」，その可能性と意義を実地に読み取ることができた。前述の通り「経営哲学」は，ここにおいて初めて「経営思想」や「経営理念」に換言できない，それらとは異なる広がりと独自性をもつものとして成立するのである。

前述の通り「哲学」が，企業において奨励されることは道徳的にも良いことであり社会に良い影響をもたらそうが，それが「経営」そのものに良い効果を及ぼさなければ，「経営」とは無縁であり，「経営哲学」とはならない。しかし「経営」の現場における「哲学」，「経営哲学」の可能性を机上で探るのみならず，それが実際に「経営」そのものの重要な要となり発展のカギとなることが，稲盛の「経営」からあらかじめ用意されていたかのように見事ぴたりと明らかになった。つまり彼は，「人間として何が正しいか」という単純明快で素朴な哲学的問いを羅針盤として経営することの重要性を明言し，それにあって経営を成功へと導いたのだ。それは，私の目指した一つ目の語義での「哲学」にある「経営哲学」の可能性を開く。さらに松下に，一つの問いとしての明言はなくとも「哲学すること」を羅針盤として人間や社会ひいては世界を深く問い続ける中で現実への理解を深めつつ公器としての「経営」の舵とりをしていたことが推察できた。

社会において，多大な社会的に影響力を持つものは何といっても企業である。「経営」の担い手が社会に与える影響力は，「哲学」を担う者の比ではない。したがって日本にあって，「経営」に素朴であっても「哲学」が見出されることの意義は大きい。日々の「経営」の中で「経営」を担う諸個人が，素朴に「哲学すること」を遂行し，人間を問い社会を問い何が正しいかについて企業内で探求し自らの行動原理を吟味しつつさらに心身ともに豊かなあり方を社会に問いかけることとなれば，それはただ生きるのではなく「よく生きる」方向へと日本を変えることにつながろう。特に自らであるところの人間に目を向けない「人間存在不問」の時代にあって，我々はそれともう一度深く問いつつ対峙し真の自己のあり方に目覚める必要があろう。人

間不問の時代の今にあってこそ，我々は人間についてあえて自分自身で問いそして考えることが必要なのだ。

Ⅶ 「看護哲学」の可能性

これまでの考察により「哲学」は，素朴ながらも「経営哲学」として「経営」にあっても有益であることが明らかとなった。しかし「経営」という利潤追求の営為において，すべての経営者がこの「経営哲学」に立って「経営」すれば成功するかは疑問である。やはり哲学的思索の才能をもつ稲盛や松下であればこそそれがうまくいったと思われるからだ。つまりは経営者個人の資質に大きく左右されるわけだ。またそれは，経営全体の方向性を指し示す言わば羅針盤的働きをなすのであり，「アメーバ―経営」のような日々の具体的な経営術とはまた異なる。日々の具体的な経営術と共にあってこそ「経営哲学」は生かされよう。ただ前述の通りこの「経営哲学」には利潤追求に自己規制をかけ公器としての良き「経営」へと導くところに大きな意義がある。そしてそのような意味での「哲学」が重要となるのは，最初にあげた「政治」や「教育」においても同様であろう。しかしさらに重要になると思われるのは「看護」においてである。

医療現場においては，患者への二つのアプローチがある。それは，「看護（care）」と「医療（cure）」である。柏木哲夫は，アメリカの三十もの病院を視察する中でチャプレン（病院付き牧師）らが目指している働きに共通点があることに気づいたという。つまり「それは，真の意味でのケア（care，配慮）ということです。このcareという言葉は，心配，世話，看護，配慮などと訳されますが，キュア（cure）という言葉と対比すると，その真の意味が理解されるように思います。cureという言葉は，治癒，治療，救済法などと訳されます。すなわちこの言葉には，元通りにするとか，治すとか，もう一度社会復帰するとかいう意味が含まれています。これに対してcareという言葉には，たとえ元通りにならなくても，治らなくても，社会復帰できなくても，とにかくケアするという意味が含まれています。多くのチャプレンが指摘したことですが，彼らの目から見ると，医師は非常にcureには興味を持っているが，careには興味を示さないとのことです。……医師は治る（cureする）見込みのある患者には一生懸命治療（cure）しますが，cureの可能性がないことがわかると，とたんに興味を失い，患者が必要とするcareを与えようとしないというわけです」[34] と言う。

「医療（cure）」は，患者をまずは主に身体医学的に捉え医学的に治療を施す故にある程度一般的な治療方法が確立されえる。しかし「看護（care）」は，柏木によれば「その人の必要に徹底的に仕えること」[35] だと言う。つまりそれは，一人一人の患者に仕え世話することであり，そこにおいては個々への人間的な関わりが全面的に必要となってくる。このような「看護」は，個別的であり，一般化・マニュアル化が困難である。患者諸個人の性格や状況またニーズなどが多種多様で異なるからだ。しかも今後のさらなる高齢化社会においては，医療現場では「医療」の敗北が増すと共に，「看護」の必要性がますます高まってくるであろう。「医療」が施しても無駄だと分かった途端に病院側から興味を失われては，患者のQOL（生命の質 quality of life）に希望はない。末期患者を前にその病める人間存在を「健康」へと向かわしめる「医療」からより良き「死」へと向かわしめる「看護」への転換が必要不可欠でありそのような機会がますます多くなってくるはずである。したがって医師・看護師などの医療者は，この「看護」について真剣に考えなければなるまい。

そしてこの「看護」においてほど，「人間とは何か」を問い続けなければならない現場はない。

キャンベル（Alastair V. Campbell）は，「『願わくば患者を苦しんでいる同じ人間同士とだけみられますように。』この医師マイモニデスの祈りの言葉が，他人の生命に介入する医学の理想をよく表している」[36] と言う。ここに言い表されているのは，医師にある単なる「医療」に尽きない素晴らしい「看護」の姿勢であろう。患者を治療すべき「患者」としてのみならず自分と同じ「人間」として理解し看護することは重要である。またペンス（Gregory E. Pence）は，「医療倫理がアメリカのみならず世界じゅうで新たな知的分野となってきたのは，それの扱う哲学的問題が普遍的なものだからだと私は考えている。たとえば，人格とは誰を指すのか，稀少な医療資源のどのような分配が正義にかなうのか，人間の生命はいつ始まるのか，誰が人間の生命を生み出す資格を持つのか，人格性はいつ終焉するのか，医療において個人の権利と社会の必要とをどのように調停するのかのような問題がそうである。これらは，人間存在，正義にかなう社会，そして理想的な医療の本性に直接関わる根本的な道徳的問いである」[37] と言う。「医療倫理」上の難問について医療現場のみならず社会全体が「人間」や「人格」といった概念について共に考え答えを出しそこからその難問，たとえば「減数手術」や「出生前診断」などに対する社会的ルールを定めていく必要があろう。

ジャン・リードとイアン・グラウンドは，共著『考える看護』（*Philosophy for nursing*, 1997）の中で，英米においては「お金を出して売り買いされる商品」と見なされる保健や医療について異論も含め改めて議論・研究する際には，哲学が大いに寄与するという。つまりは，「哲学的思索は，いろいろな形式でもって，そうした問題のいろいろな側面に焦点を当てることができます。保健・医療がどのようなものであるかについて問いを立てて，論じるのであれば，議論で用いられる概念や用語をじっくりと検討する必要が出てくるでしょう。『消費者』や『商品』といった考えは，『患者』や『専門業務』とは対照的な考えですが，哲学では，こうした用語の定義のされ方や使われ方について問題提起します」[38] と言う。また「哲学にできることは，概念の定義を明確にするだけにとどまりません。哲学的思索では，概念を支える思考と，概念を用いた論証の仕方を吟味することにより，まず，議論がしっかりしているか弱いかを見極め，しっかりした論理を拠り所にしているかそうでないかを明らかにすることができます」[39] と言う。「哲学を，さまざまな問題の吟味に役立つ道具類として考えたほうが，きっと，より正確なのだと思います」[40] と言う。

確かに「医療」のみならず「看護」においても，そのような「哲学」は役立とう。リードらが言うように「哲学」は「用語の定義のされ方や使われ方」について問題提起する。またそれは，ペンスの言うように「人格とは何か」ひいては「人間とは何か」といった哲学的問いを深めることで医療倫理上の難問の議論・回答に役立つ。しかし「看護」においては，医療倫理上の問題についての概念の定義やより論理的な議論やルール作りといった次元とはまた異なるさらなる姿勢が求められる。

つまり「看護」には，それらの問いを日々抱えた患者諸個人との個別の関わりの中でそれを日々共に問い考え忍耐強く答えを模索する姿勢が求められるわけである。それ故に，より良き「看護」のためにそれらの哲学的問題は個々の「看護」の担い手側においても，日々あらかじめ自分自身に突き付けられた問題として捉え，問い考え深めなければなるまい。つまり「看護」においては，一人一人の患者と共にあるために日々「哲学すること」，「知を愛する姿勢」が求められるのである。カントにおける「(1)私はなにを知りうるか。(2)私はなにをなすべきか。(3)わたしはなにを望むことが許されるか。(4)人間とはなにか。」という問いやハイデガーにおけ

る「なぜ一体，存在者があるのか，そして，むしろ無があるのでないのか。」といった問いを問い続ける姿勢こそが，様々な医療倫理的問題を自らの生に重ね合せて当惑しまた困難な病気を抱え人間を問わざるを得ない立場に立たされている患者とその家族と共にあるべき「看護」の担い手にとっては，重要なのである。つまり結局「看護」は，「人間とは何か」という哲学的な異常な問いを常に問い続ける「哲学すること」というその忍耐強い遂行の内にあって「今ここにいる患者」を理解し仕え支えていかなければならないのだ。仕事に追われともすれば患者を物扱いしてしまいがちな中で，「人間としての患者とは何か」ということを問い続けなければならない。

したがって「経営」における利潤追求の営みとは異なり儲けを度外視し，もはや治療不可能と分かっても，あくまで「人間」としての患者に向き合い，理解し支え世話をしそのQOLを追求する医療現場では「看護哲学」つまりは「看護」における「哲学すること」は，積極的に評価されるべき意義深いものであると考えられる。であるから「看護」における患者理解に関して，現象学が積極的に論じられ，また精神科医ヤスパースから「実存哲学」も生まれた。しかもこの「看護哲学」の特徴は，実地に患者との交わりの中で深められていくことである。学的「哲学」のようにただ一人で問うのではなく，一人一人の医療者が患者との様々な関わり合いの中で，「人間としての患者とは何か」という問いを深め答えを探求し続けるのである。つまり「看護哲学」は，看護側の医療者が一人深めるのではなく，また患者一人が深めるのでもない。お互いが相互に日々の「看護」の中で教え教えられる中で深められるのである。それは経営者が従業員との関わりの中でその素朴な哲学的問いを共に深めていく「経営哲学」と同様に見える。しかし「看護哲学」が，それと異なる点は労使関係や単なる利害関係から脱却している点である。そこにおいては一種の同胞的な関係が理想となろう。

Ⅷ　おわりに

「哲学とは哲学することだ」とまとめることで「哲学」への理解が深まる面もある。またその定義でこそ，素朴に哲学している経営者へのアプローチも可能となり，その内的行為が経営や看護にも良き効果をもたらしていることを分析・研究することが可能となる。それが私の論の要である。しかしその反面，その定義で「哲学」が分かった気分になり判断中止になってはならない。本来は，一つの哲学理解の下にあっても，それを自ら遂行しその中で苦悩し無知を知りお手上げであることを痛感しつつもまた「哲学すること」へと還っていく姿勢が必要なのだ。つまり「哲学」とは，本来，自ら素朴な哲学的問いを問う，「素朴な哲学すること」を出発点としつつもそれに止まらず，さらに自らの置かれた現実を問い，哲学者の原書に学びつつ「哲学すること」の中で，それが遅々として進まぬあり様で自らの無知が分かってくる極めて厄介なものなのである。「経営」や「看護」と素朴な「哲学」との接点を見つつも，我々は「哲学」にあるそのような難解さも併せて理解しておく必要があろう。素朴にであっても，一つ目の語義としての「哲学」に踏み込む以上，そのことに留意しなければならないのだ。

そして経営者にある問い・思索は，そのような本格的な哲学的問い・哲学研究に向かうものではなく，人間・社会などを問うなどあくまで素朴に哲学的な問いを立てることに止まる。経営者である以上，彼らはあくまで経営に専念するプロであり，通常は哲学研究者にある如き，哲学書研究に専念する意味での「哲学すること」にまで到らないのは当然だからだ。したがって経営者にある「哲学すること」とは，あくまで「素朴に哲学すること」であることもまた明確

に押さえておかねばなるまい。もちろん，経営者の中にあっても，素朴を超え出た本格的な哲学研究者へとさらに進む人物があっても不思議ではないし，そのことは否定しない。ただし前述の通りそこまで踏み込まなくとも，「経営哲学」にあって素朴に「哲学する」中で，より真実で正しいことを経営の中で追求していくこともまた個人・社会にとって大変に意義深く有益である。また何よりも素朴ではあるにしてもそこまでの厳しい哲学的姿勢の一端が，経営に携わる多忙で偉大な経営者，稲盛和夫や松下幸之助にも見出すことができることは新鮮であり且つ頭が下がる思いである。また看護学の分野においても前述の通り哲学を素朴に問うに止まらず深め哲学研究者となった方々も存在する。

現代は「人間不問」の時代である。他者を人間と思わず，また人間とは何かも問わず理解もしない。そのような人間観に起因する事件も多い。これは，企業の偽装問題から医療・介護の現場での事件・事故また社会の無差別殺人に及ぶまで日々実感させられる深刻な社会問題である。したがって人間と世界についてその根本から問い理解を深める「哲学」という処方箋が少しは社会に役立とう。特にこれまで考察してきたように，「看護」においては今ここで老い病み素朴に哲学せざるを得ない悩める患者との関わり合いの中で，見失われがちな「人間としての患者とは何か」を自ら「哲学すること」は日々必要不可欠である。「看護」を担う医療者は，人間に無関心にならず患者と共にそれを問いそれを理解し仕えるプロであってしかるべきだ。したがって「経営哲学」と共に高齢化社会にあって，医療現場における「看護哲学」の可能性をもさらに深め訴えていきたい。

注

1）本稿は，拙稿である京都大学京セラ経営哲学寄附講座編『経営哲学を展開する』（文眞堂，2009年）の第6章「病める経済大国日本への処方箋『経営哲学』の可能性～稲盛和夫の目指すところと経営の中で『哲学すること』～」（143-178ページ）。および，学会発表「『経営哲学』の『哲学』再考からの再定義」（経営哲学学会第26回全国大会2009年9月18日京都大学）で論じたことをさらに推敲し，またさらに「Ⅶ.『看護哲学』の可能性」以下を加えてまとめたものである。

2）新村出編『広辞苑』第六版，2008年，1922ページ。

3）『広辞苑』によれば「哲学」は，一つ目の語義として，「（philosophy）（philosophiaは愛智の意。西周は……希哲学と訳し，それが哲学という訳語に定着した）物事を根本原理から統一的に把握・理解しようとする学問。古代ギリシアでは学問一般を意味し，近代における諸科学の分化・独立によって，新カント派・論理実証主義・現象学など諸科学の基礎づけを目ざす学問，生の哲学・実存主義など世界・人生の根本原理を追求する学問となる。認識論・倫理学・存在論・美学などを部門として含む」（新村出編『広辞苑』第六版，2008年，1922ページ）とある。

4）ヴァイツゼッカー著，新垣誠正他訳『人間とは何か』312ページ，ミネルヴァ書房。
Carl F. von Weizsäcker, Der Mensch in seiner Geschichte, 1991.

5）Karl Jaspers,（Serie Piper13）*einführung in die Philosopie*, Piper Verlag, München, 1992, 30. Aufl., 1953, S. 12-13（ヤスパース著，草薙正夫訳『哲学入門』新潮文庫，2005年63刷改版，1954年，15ページ。）

6）ebd. S. 16（同上書，22ページ。）

7）ebd. S. 21（同上書，32ページ。）

8）ebd. S. 13（同上書，16ページ。）

9）ebd. S. 13（同上書，16ページ。）

10）ebd. S. 13（同上書，16-17ページ。）

11）ハイデッガー著『形而上学入門』平凡社ライブラリー，1994年，28-29ページ。

12）Peter Heintel, Dietmar Pickl, *Think Philosophieren・Ein Lehrbuch*, Österreichischer Bundesverlag Ges. m. b. H., Wien, 1991, S. 6.
《なおこの書は，オーストリアのギムナジウムの教科書として採用されている。》

13）Ebenda, S. 6.

14）Kant, *Kants Werke IX Logik, Physische Geographie, Pädagogik*, Walter de Gruyter & Co, Berlin, 1923, S. 22.

15）Ebenda, S. 25.

16）Ebenda, S. 26.

17）Ebenda, S. 25.
カント著『カント全集　第17巻　論理学・教育学』岩波書店，2001年，34-35ページ。

18）ハイデッガー著『形而上学入門』平凡社ライブラリー，1994年，22ページ。
Martin Heidegger, *Einführung in die Metaphysik*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1998, 6. Aufl., 1953, S. 6.

19）同上，22-23ページ。Ebenda, S. 6.

20）同上，30-31ページ。Ebenda, S. 10.

21）同上，31ページ。Ebenda, S. 10.

22）稲盛和夫著『NHK知るを楽しむ人生の歩き方～稲盛和夫　ど真剣に生きる～』日本放送出版協議会，2006年，14ページ。

23）稲盛和夫，講義「なぜ経営に哲学が必要か」鹿児島大学京セラ経営学講座講義，2001年7月11日。

24）稲盛和夫は，テレビのインタビューの中で，「理念に反することをしてはいけない。決して理念を曲げずにやっていく」，「会社が潰れても理念を曲げてまで生き延びても意味がない。一度たりともわずかであっても理念を曲げてはならない」（稲盛和夫，「第一回リーダーの条件」（2006年6月21日NHK教育放送分），『NHK知るを楽しむ人生の歩き方　～稲盛和夫　ど真剣に生きる～』）と言っている。

25）木谷重幸「稲盛和夫の経営哲学」（経営哲学学会編『経営哲学の授業』，株式会社PHP研究所，2012年）。

26）同上，40ページ。

27）松下幸之助著『人間を考える―新しい人間観の提唱―』PHP研究所，1972年，「まえがき」1-2ページ。

28）松下幸之助著『一日本人としての私のねがい』実業之日本社，1968年，219ページ。

29）同上，219ページ。

30）同上，222ページ。

31）同上，223-224ページ。

32）同上，224ページ。

33）同上，221ページ。

34）柏木哲夫『死にゆく人々のケア』医学書院，1978年，2-3ページ。

35）同上，3ページ。

36）A. V. キャンベル著・羽白清他訳『医の倫理　医師・看護師のジレンマ』紀伊國屋書店，1978年，133ページ。Alastair V. Campbell, *Moral Dilemmas in Medicine*, Longman Group Limited, Edinburgh, 1972, 1975.

37）グレゴリー・E・ペンス著・宮坂道夫他訳『医療倫理1』みすず書房，2000年，「日本語版への序文」iページ。
Gregory E. Pence, *CLASSIC CASES IN MEDICAL ETHICS*, The McGraw-Hill Companies, New York, 1990.

38）ジャン・リード，イアン・グラウンド著，原信田実訳『考える看護　～ナースのための哲学入門～』医学書院，2001年，8ページ。
Jan Reed, Ian Ground, *Philosophy for nursing*, a member of the Hodder Headline Ground, London, 1997, p. 5.

39）同上，9-10ページ。Ibid., p. 6.

40）同上，11ページ。Ibid., p. 6.